
傷跡

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷跡

【Nコード】

N0412H

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

江^え水^{みづ}知^ち鈴^{すず}は姉の小鈴を亡くし、すべてがモノクロにしか見えない世界を生きていたとき。一人の教師が現れた。その男は姉の小鈴の彼氏だった人だった。知鈴はその人にどんどん…

傷跡 1

プロローグ

何故、いなくなったの？

何でこの世から消えてしまったの？

一つの命が消えるってこんなに重くて悲しくてつらいものなんだ。

頬を一粒の雫が伝わったのを感じた。

いつも双子みたいに仲がよかったよね。

お姉ちゃん。

今もこの世にお姉ちゃんがいないって思えないよ。

思いたくないよ！！！！！！

・
・
・
・
・

私は江水 えみず 知鈴 ちすず。

高校一年生。

お姉ちゃんは江水 小鈴 ちすず といふのだが。

もう、この世にはいない。

だから何年経っても大学一年生のまま。

私は髪の毛がセミロングで緩くカールがかかっている。

耳には大きくぶら下がった円い形の銀色の三十になっているピアス。

まつげは長くて多くて目は綺麗な二重。

唇はいつもグロスを塗っていてツヤがある桃色。

男に苦労したことはない。

友達にも苦労はしない。

だけど、ただ一つ。

自分に重く押し掛かるものがある。

私の大好きでいつも何でも味方してくれたお姉ちゃんがないだけ。

私の前からいきなりいなくなった。

触った頬は冷たくなっていて人が消えることを実感した。

人がこの世を去るのはみんな知ることだ。

でも、こんなに早くはいなくならなくてもいいじゃないか。

私の心に一つの大きな穴が開いた。

いつも帰ってきたときに笑顔で「ただいま」って言ってくれるお姉ちゃんが消えた。

私は何かを考える力を失った。

もう逢えない。

もう触れない。

もう話せない。

もう…いない…

考えたくない。

私は今日もブーツとして学校に向かった。

目の奥にはいつも笑ってたお姉ちゃんの抜け殻が映る。

もう何もかも考えたくない。

そう思うようにもなってきた。

ガラッ

私は教室の古い引き戸を開けた。

白いペンキで塗られていて、ほこりが少し覆いかぶさってる感じのもの。

いつも手にする感触は懐かしさと切なさを感じるときがある。

『あ、知鈴おはよ。』

女友達みんなが私にあいさつをしてくれた。

私は作った笑顔になった。

何故かって？

そんなの決まってるじゃない。

「おはよ。」

笑わなきゃ、笑わなきゃここにはいられないからだよ。

立ってられない。

今にも崩れ落ちそうな体を支えるためには、これくらいしかできないから。

私はあれから食べ物を口につけることすらほとんど無くなった。

あのときのように笑って食べられない。

お姉ちゃんは私の誕生日プレゼントを買いにデパートに出かけた。

そのときにお姉ちゃんが…

車に跳ねられたと電話越しに重い口調で病院の先生から知らされた。

世界はなんて残酷なんだろうか。

そう心の中で何回もつぶやいた。

お姉ちゃんは帰ることができなかった。

お姉ちゃん。

私、待ってたんだよ？

ねえ、帰ってきてよ。

今でも待ってる。

私は今日も外を見ながらボーツとした。

もう何も話す気にもなれない。

笑う気にもなれない。

世界がすべて白黒の世界に見える。

・
・
・
・
・

キーンコーンカーンコーン…

ホームルームの時間。

ガラッ

いきなり教室に入って来た先生は知らない人だった。

「このクラスの担任の先生は結婚して退職をしたので。今日からこのクラスの担任をまかされた。嵯^{さみぎ}巳^み儀^ぎ 竜^{たつと}斗^とだ。これからよろしく。

」

男の人はそう言ってニカッと明るく笑った。

色が。

色が鮮やかに染まっていく。

綺麗。

初めて綺麗だと思った。

いつもの風景のはずなのに。

ん？

あの人どっかで見たとあるような気がする。

男の人は黒髪で少し長くて丁度良い癖っ毛で綺麗な黒い目。

黒いスーツに身をまとい凜とした立ち姿。

紳士的に見えた。

声が大きくて聞きやすい男の人の声。

笑った顔がお姉ちゃんに似てる。

あ、そう言えば、お姉ちゃんの…彼氏？

お姉ちゃんと楽しそうに話してる人がいるな—と思って近づいた
ときに見えた人。

あの人だ。

確か。

教師の仕事してたんだ。

私は一筋の光りを見つけたような気がした。

目が大きく開いた。

・
・
・
・

「今日の国語は終わり。」

先生がそう言って。

学級委員が…

「気をつけ・礼!!」

そう学級委員が叫びみんな遊びに席を立つ。

そして、私は…

先生を追いかけた。

きっとお姉ちゃんのことをまだ覚えてるはず。

愛してるはず。

話したい。

「先生。」

私は先生を呼び止めた。

きっと…

「はい? って君は。」

先生は私を見て何かを言いかけたが途中で止まってしまった。

先生は知ってるから止まってるの?

少し気まずそうな顔をしてる先生。

「先生はお姉ちゃんの彼氏でしたよね?」

私は先生のスーツの襟をつかんだ。

必死に尋ねた。

何でかわからないけど。

「ああ、そうだったよ。君は小鈴の妹さんだよね？」

やっぱり。

間違っただけじゃなかった。

私は力をこめていた手を緩めて引いた。

私は苦しむ運命なのかもしれない。

ここで、先生に逢ったのも。

お姉ちゃんは私の誕生日プレゼントを買いに行く為に出かけたことも。

私のせいでお姉ちゃんは死んじゃった。

頬を伝わる雫。

冷たくて重い。

息苦しくて。

呼吸がまともできない。

私はこの重みを背負っていかなきゃいけないんだ。

苦しいよ。

私は思わず座り込んでしまった。

お姉ちゃん。

ごめんね。

「知鈴ちゃん？どうしたの？何か痛いところあるの？」

嵯巳儀先生は心配しながら私の顔を覗き込んできた。

私はただ首を横に振った。

お姉ちゃん。

ごめんね。

ただその言葉が頭の中をぐるぐる回った。

「知鈴ちゃん？お姉ちゃんはもういないんだ。お姉ちゃんに縛られるのは辛いから、あまり考えないほうがいいんじゃないかな？それじゃ、俺は次の授業に行くね。」

嵯巳儀先生はそう言って違うところに行ってしまった。

お姉ちゃんは、あの人が好きだったの？

本当に？

お姉ちゃんのことを考えるなっという人のことを好きだったの？

あの人が、本当に彼氏？

お姉ちゃんを考えなくなったらお姉ちゃんが消えちゃうよ。

心の中にもいないとお姉ちゃんがなくなっちゃうよ？

お姉ちゃん、本当にあの人を好きになったの？

私は動揺しながら心の中で尋ねた。

・
・
・
・
・

私は中庭のベンチに座りながら赤く腫れた目に濡れたハンカチをかぶせ冷やした。

もうお姉ちゃんはこの世にいない。

でも、私が覚えてなきやお姉ちゃんが消えちゃう。

思い出も消えちゃう。

そんなのだめだよ。

私はいろんなことを考えながら冷やしていた。

熱かった瞼の奥にはお姉ちゃんの笑った顔が焼きついている。

嵯巳儀先生はお姉ちゃんがいなくなって寂しくないのかな？

私は…辛いよ。

誰か、私の心にあいた大きな穴を埋められる人はいるのかな？

私はなんとなく考えていた。

ヒヤッ

いきなり冷たい何かが私の頬に当たったから。

ビクッ

私は体が大きく跳ねた。

心臓が一瞬止まるかと思うぐらい驚いた。

私はハンカチを取り、当たってきた方向を見た。

「オレンジ…ジュース？」

私は円い円柱に書いてあった文字を読んだ。

目がぼやけてあんまり見えなかった。

私は目をこすった。

「はい。オレンジジュース好きでしょ？」

話し声が聞こえたのでその声がするほうを眺めた。

あ、嵯巳儀先生だ。

ん？

私は首を傾げた。

「あ、はい。好きですけど…。何で知ってるんですか？」

私は手にぶら下がっている缶を受け取りながら尋ねた。

私は驚いた。

家族以外に言ったことが無いこと。

何故かと言うと、友達とかに言ったら幼稚扱いされるから嫌なのだ。

「ああ、小鈴に聞いたんだ。小鈴が話すことってほとんど君のことだったんだよ？知らないでしょ。」

嵯巳儀先生はベンチに座っていた私の隣に座った。

横顔始めて見る。

私は驚きながら先生のほうを向いた。

笑っている顔がとても鮮やかだった。

「小鈴がいつも話すからよくわかるんだ。君のことが大好きなんだなって。ちょっと嫉妬するぐらいね。でも、わかったよさっきのこと。君達の家族の絆がどれだけ固いのか。君があまりにも顔が必死な顔だったから。きっと幸せに仲良く暮らしてたんだろうね。」

嵯巳儀先生は笑いながらそう言ってくれた。

私はいつの間にか泣いていた。

お姉ちゃん。

私のせいで…

ごめんね。

私は自分の心を押し殺した。

頬に温かいぬくもりが伝わってきた。

え？

嵯巳儀先生が私の涙を指で拭ってくれていた。

そのとき、何かの風が吹いたような気がした。

温かくてふんわりしている風。

何か懐かしくて心に響いたような気がした。

私は顔が熱くなった。

「あれ？顔が赤いけど。熱でもあるのかな？」

嵯巳儀先生は私の額に自分の額をあててきた。

私はますます熱くなり、気が飛びそうになった。

私！！

まさか！！！！

・
・
・
・
・

お姉ちゃんごめんね。

ごめんね。

私も行くのかな。

お姉ちゃんがいるところ……

・
・
・
・
・

次に続く……

傷跡2

「あれ？熱あるんじゃないの？保健室一緒に行こうか？」

嵯巳儀先生は私の顔を覗き込みながら尋ねてきた。

近すぎ！！！！！

バクンッ

心臓が大きく鳴った。

今の音、先生に聞こえちゃったかな？

目が全開に開いた。

「だ、大丈夫です。」

グッ

私は近づいてきた先生を押しした。

これ以上は無理！！！！

私は逃げ出した。

カランッ

ベンチを転がる一つの缶。

その音は何かに似ていた。

ああ、何か懐かしい。

お姉ちゃん。

ごめんね。

私、お姉ちゃんの思ってた人を好きになっちゃった。

もう、いつそのことここからいなくなりたい。

どこか遠い誰も知らないところへ行きたい。

どこか

遠い…

とっさ…

へ…

私はそのとき意識が遠のいた。

バタッ

私は倒れてしまった。

そういえばあんまり食べ物を口にしていなかったから…

ああ、きつとお姉ちゃんにもうすぐ会えるのかな。

お迎えかな？

このままお姉ちゃんのところに行きたいよ。

フワッ

え？

私は薄っすら目を開いた。

嵯巳儀先生？

私はそのあと意識を失ってしまった。

どこかに心を置いてゆきたかった。

いつか、何も思わないときがくるのかな？

・
・
・
・
・

カーカーカー。

カラスが「夕方だよ。」と伝えているかのように鳴いていた。

私はゆっくりと目を開けた。

景色全体が赤く染まっている。

ここは？

私は起き上がって周りを見た。

ここは、保健室みたいだ。

先生がきつとここまで運んできてくれたのだろう。

あの感触はとても安心できた。

あたたかくて、安心できて、優しくて。

まるで、母親のよう。

私は手の平を見たり、足を見たり、腕を見たり、きよろきよろしていた。

何か落ち着かない。

胸がざわつく。

何か起こるのかもしれない。

ガラッ

いきなり保健室の白いペンキで塗られて動物の写真や風景の写真が画鋏で飾ってある引き戸が開いた。

私はそのほうを見た。

体が一瞬反応した。

「あら？起きてたの？ただの貧血よ。ちゃんと食べてなかったでしょ？食べないところいうふうに倒れるからね。ちゃんと食べてきなさい。」

保健の先生は入ってきてそうそういろんなことを早口で言ってきた。

白い白衣を身にまとい黒縁眼鏡をかけて優しい笑顔だ。

懐かしい。

小学生以来かも。

薬の匂い。

「ん？元気無いわね？何かあったの？」

保健の先生は私の顔をきよとんつとした顔で見てきた。

何か頭がボーっとする。

もう何も考えたくない。

その時はそう思えた。

「先生。人の大事な人に手を出すって…」

私は言葉を言いかけて止まった。

私は最低だ。

自分のひどさに気が付いた。

「ん？何？」

保健の先生は心配そうに私の顔を覗き込んできた。

私は目をそらした。

「なんでもないです。」

私はそう言って苦笑いをしながらベットから降りた。

私は誰を信じればいいんだろう？

私はどの道を進めばいいんだろう？

前はどうやって進んでたっけ？

誰か、答えを知ってる？

この思いをどこかに投げ出せないのかな？

「あら？歩けるの？」

保健の先生は少し驚きながら口に手を当てた。

この気持ちを押し殺してしまえばもう何も考えなくなる？

誰か…

私を救って。

この見えない暗闇の迷路から。

「はい。では、帰ります。迷惑をおかけしました。では、失礼します。」

私はそう言っただけで保健室を出た。

この気持ちを我慢して何も行動しなかったら何も考えなくてすむ？

答えはどこにあるのかな？

私は茜色に染まる廊下をゆっくりふらつきながら歩いた。

目がぼやけてしょうがない。

「おい。大丈夫か？顔色悪いぞ？」

いきなり私に話しかけてきたのは…

嵯巳儀先生だった。

私はゆっくりと顔をあげて嵯巳儀先生の顔を見た。

この顔。

私、苦手だ。

心配して、切なそうな顔。

まともに顔も見れない。

「大丈夫です。」

私は目を逸らしながら私を支えてくれていた腕をそっとよけた。

私はまた歩きだした。

見えない明日に向かって。

何一つ明るいものなんて存在しない明日に。

そのときだった。

「少しここで待ってる!!!」

いきなり大きな声で呼び止められた。

私は体がビクッと跳ねた。

今のは。

怒鳴ったの嵯巳儀先生だよな？

私は嵯巳儀先生のほうに振り返った。

「後三分ここで待ってる。動くなよ。動いたらただじゃおかないからな。」

何か怒ってる顔をしている。

怖い。

ビクッ

体が締め付けられる感じがした。

目つきが鋭くて。

まるで、ナイフみたいだった。

突き刺さるような瞳。

これは動けないよ。

嵯巳儀先生はそう言って職員室に入ってしまった。

私は先生が来るまで座って待っていた。

私はこれからどうしたらいいのかな？

・
・
・
・
・

ガラッ

嵯巳儀先生が職員室から出てきた。

「さ、行くぞ。」

嵯巳儀先生が無表情で私の腕を掴んだ。

私は無言のままその腕を引かれたほうに立って移動した。

いって言ったのに。

この空気嫌いなんだよ。

私はちょっと苦しく思った。

バタンッ

私は嵯巳儀先生が乗った後に車の中に入った。

車の中は落ち着くいい香りがした。

なんだろうこの香り。

いい匂い。

「嵯巳儀先生。なんかいい香りがするんだけど。何？」

私は無表情のまま尋ねた。

何か話す話題が欲しかったから。

助かった。

いいときに話題ができた。

私はホツとした。

「ああ、アロマだよ。男の癖に気持ち悪いと思うけど。香るキャンドルが好きだね。昨日のはフローラルの香りだからまだ残ってるんだよ。小鈴も好きだったな。」

嵯巳儀先生は車にエンジンをかけ走り出したときに応えてくれた。

そうだったんだ。

お姉ちゃんもこの車、乗ったことあるんだ。

何か、ちょっとだけ複雑な気持ち。

「……嵯巳儀先生はタバコ吸わないんですか？」

私は尋ねた。

何か話さなきゃ。

何か話さなきゃ。

今にも泣きそうで辛い。

「ああ、タバコは吸わないよ。俺、小さい頃からあのキツイ匂い嫌いだから。」

嵯巳儀先生は嫌そうな顔をして言った。

ふーん。

私はただ頷くしかなかった。

ここにいるのは本当はおかしいんだ。

嵯巳儀先生はただ私の体が心配なだけ。

でも、私にはその優しさは辛いものがある。

どんどん嵯巳儀先生に惚れてしまっ、惹かれていってしまっから。

駄目だ。

お姉ちゃんを殺したのは私。

もうお姉ちゃんを苦しめるわけにはいかない。

だから、嵯巳儀先生のごことは諦めなくちゃ。

一つの雫が頬を伝った。

きっと嵯巳儀先生は気づいてない。

運転に集中しているから。

私は顔を隠しながら涙を急いで拭いていた。

また嵯巳儀先生が心配しちゃう。

そしたら、私はもっと困る。

だから見つからないうちに。

「お前、ちゃんと睡眠と食事取ってるのか？いきなり倒れやがって心配すんじゃないかよ。」

嵯巳儀先生は気づいてなかった。

よかった。

少しホツとした。

「大丈夫だよ。」

私はそれだけ言ってまた黙ってしまった。

少し声が震えた。

隠さなきゃ。

もうこれ以上はれたくない。

「隠しても無駄だぞ。泣いてることはわかってるからな。心配されたくないなら。ちゃんとしっかり生活態度をよくしろ。」

嵯巳儀先生はそう言って黙った。

気づかれてたんだ。

なーんだ。

がんばってたのに。

もう涙。

止められないや。

拭っても拭っても出てくる。

嵯巳儀先生がそれ以上何も言葉にしなかった。

でも、それが優しさだってことはすぐに感じ取れた。

ありがとう。

嵯巳儀先生。

私は泣きながら、心の底から感謝した。

・
・
・
・
・

きっとお姉ちゃんが拒んでる。

私が嵯巳儀先生を好きになるのを。

当たり前だ。

私は人のものを取ってるのと同じだから。

私。

最低だ。

・
・
・
・
・

次に続く…

傷跡3

「さ、着いたぞ。」

嵯巳儀先生はうとうととしていた私のことを揺らして声をかけてくれた。

その声をかけてくれた顔がなんとも言えぬ優しさが伝わってきて、すごく嬉しくなった。

だめ、だめだめだめ!!!

こんなのに引つかかっちゃだめ!!!

目を覚ませ私!!!

私は一生懸命首を横に振っていた。

「大丈夫か??!!」

嵯巳儀先生は驚き顔で声が裏返っていた。

は、恥ずかし!!!

私は顔が熱くなった。

多分顔が赤くなってると思う。

なんとなくわかる。

「大丈夫です！！ごめんなさい。あれ？でも、何で先生が私の家知ってるの？」

私はふと疑問に思い、心配しながら尋ねた。

嵯巳儀先生は呆れたのか一つため息をついてから教えてくれた。

「君のお姉ちゃんの彼氏だったから……。……。でも、もういないけどね。」

嵯巳儀先生は困った顔で言ってから悲しそうな顔をしていた。

その顔はあまりにも悲しそうで私は胸が締め付けられた。

お姉ちゃんがいたら今頃……

私はこれ以上考えないようにした。

考えたら、きっと何もかもが溺れていきそうで怖い。

何かが崩れそうで怖い。

何もかもが暗闇になりそうで怖い。

「送ってくださりありがとうございました。では、失礼します。」

私は軽くお辞儀をして車のドアを閉めた。

嵯巳儀先生は笑顔で車を走らせて行ってしまった。

私はゆっくりと家に入り…

「ただいま。」

私は一言お母さんにそう言った。

いつものこと。

でも、一人かけている家族は家族とは言えなくなりそうだととても悲しく思う。

すると目の前にお母さんが走ってきた。

「あなたあのになんか言われたの?!?!何であの人の車に乗ってるの?!?!?!?!」

お母さんは何故か慌てていた。

何をそんなに慌てているのかわからない。

お母さん???

私は動揺しながら心で尋ねた。

「え、ただ、送ってもらったただだよ。今日体調を崩したから。心配してくれて。」

私は慌てているお母さんに連れられ一緒になって慌てて説明した。

私は頭が混乱してきた。

何で？

何をそんなに慌ててるの？

焦ってるの？

「それなら…いいわ。」

お母さんはそう私に言い残してリビングの大きな家族四人で囲んでいた机のイスにため息をつきながら腰をかけた。

おかしい。

いつものお母さんじゃない。

まあ、お姉ちゃんがいたときの顔ではないけど。

でも、あそこまで目を見開いて慌てているお母さんは始めてみた。

本当のお母さんはどこにいったのかな？

あのときの笑顔は何処へ行ったのかな。

家族四人で囲んでいたテーブルが妙に悲しそうで。

今にも泣きそうになる。

あのときの家族にもうもどれないの？

お姉ちゃん。

ごめんね。

私の誕生日プレゼントなんて。

買いに行かなきゃ。

こんなことにならなかったのに。

私は自分の部屋に入って大泣きした。

もう、何もいらない。

何でもするから。

だから。

だからお姉ちゃんをかえして!!!!!!

傷がどんどん深く広がっていく。

傷をえぐる悪魔。

蝕まれていく心。

もう。

あのとときの風景は戻ってこない。

みんなの笑顔が家から消えていく。

もう、笑えない。

ああ、世界はなんて残酷なんだろう。

・
・
・
・

翌日…

私は学校の教室に着いた。

今日は少し早起き。

なんだか昨日は眠れなかった。

そのせいもあってか目が赤く腫れている。

こんな顔じゃみんなが心配する。

私はトイレで濡れたハンカチを目に当てた。

私は空気が冷たいのを感じた。

誰もいないって、寂しいな。

冷たい空気。

風が足のふくらはぎをすり抜けていく。

一人つてこんななんだ。

私はそう実感しながら腫れていた目も治まってきたので教室に戻ることにした。

あのときに先生から感じた優しさが今も忘れられない。

体に焼き付いてる感じ。

全部焼きついて取れない。

きつとお姉ちゃんの妹だから余計に優しくしてるのかもしれない。

でも、私はその優しさにどんどん吸い込まれてくような気がする。

笑顔に優しさに微笑みに声に心配に。

すべてが…

私のものになってほしいと願っている。

届かない思い。

こんな思いなんて捨ててしまいたい。

放り投げてしまいたい。

苦しいよ。

私は締め付けられる胸をおさえた。

ガラッ

私は教室の古い引き戸を開けた。

その目の前に映ったのは。

「嵯巳儀：先生。」

私はそのときに見てしまった。

驚いた。

何故先生が？と思った。

もう、何もかもが溺れていく。

嵯巳儀先生の頬を無数の雫が伝っているところ。

私は泣いている嵯巳儀先生を走って抱きしめた。

私はいつの間にか泣いていた。

先生がこんなにも傷ついていることに気づいてあげられなかった。

ごめんね。

先生。

一刻も早く嵯巳儀先生を抱きしめてあげたかった。

どんな思いを抱えてるのは私にはわかってあげられないかもしれないけど。

どんな思いも私が受け止めてあげたいよ。

先生。

私、やっぱりあなたが好き。

「江水？何でお前……」

私は嵯巳儀先生の言葉をさえぎって言った。

早く言いたかった。

でも本当は言いたくなかった。

お姉ちゃんを裏切ってしまう。

この言葉を。

「私、先生のことが好きです。」

私は嵯巳儀先生を抱きしめながら言った。

先生の背中。

すごくあたたかい。

私は抱きしめる力を強めた。

バツ

いきなり私の腕を先生が掴んだ。

「わかってるのか？俺は教師だぞ？これはれっきとした犯罪になりかねる。それでも、俺を思い続けるのか？」

先生は泣きながら言った。

きつとお姉ちゃんのことともそうしてきたのかもしれない。

自分にはふさわしくなくて思ったのかもしれない。

でも。

でもね、先生。

人を好きになるってこういうことを言うんだ。

「それでもいい。先生が好き。ごめんね。これじゃあ、お姉ちゃんのことを裏切ることになっちゃう。でもね、やっぱり先生のが好きなんだ。諦められないんだ。」

私は先生のことを抱きしめ、耳元で囁いた。

ごめんね。

でも、好きだよ。

お姉ちゃん。

ごめんね。

裏切るようなことして。

私がいなければすべてこんなことにはならなかったかもしれないのに。

お姉ちゃんが死ぬことも先生がお姉ちゃんを諦めることを。

私はすべて裏切ったことになる。

でも、この人を愛してしまった。

きつとこの人じゃないとだめなんだ。

私が思う人は優しくして笑顔がすごく綺麗で人の前では決して泣かない人。

でも、泣いてる理由はお姉ちゃんが関係してることだと思う。

先生はきつとまだお姉ちゃんが忘れられない。

でも、私は先生を好きになった。

すべてを敵にしまった。

「ごめんね。」

「もう逃がさないからな。」

先生はそう言って私に先生の唇を重ねた。

先生の涙が私の頬に一粒落ちた。

きっと先生も大きな傷を心に秘めてる。

誰にも見せないように。

我慢してきたんだなって。

この涙でわかる。

先生の傷も私が全部受け止められたらいいのに。

私はそう思いながら目をつぶった。

何回も唇に降ってくる口づけにただただ、応えるだけだった。

先生？

今、目をつぶってるけど。

目の奥には誰を映してる？

・
・
・
・
・

私は学校で勉強なんてする気になれない。

いつも家でもやってるから。

嫌いだけど。

お母さんにこれ以上迷惑をかけたくないから。

心配させたくないから。

せめてちゃんとした会社に入ってお母さんに喜んでもらいたい。

また、あのときみたいに満面の笑みで笑ってほしい。

そう思ってるから。

私は今朝のことがあってもただ毎日窓を見てボーっとしてるだけだった。

きっと内心は気にしてる。

すごいソワソワしてる。

でも、こんな姿を見せたら怪しく思われちゃうから。

外に出さない。

私はみんなを裏切った。

すべてを敵にした。

みんなはきつとまだ気づいてない。

私が犯した罪を。

ごめんね。

私はただそれだけしか言えない。

「大丈夫？ 顔色悪いけど。」

いきなり誰かの声がした。

私はそのほうに顔を向けた。

目の前には茶髪でワックスをつかって髪を立たせていて、黒いピアスをしている男子が立っていた。

目つきがちょっとだけ悪くて。

目の奥に何かを持っているような瞳。

この人は何を考えてるんだろう。

「大丈夫よ。気にしないで。」

私はそう無愛想に言ってまた窓の外を眺めた。

こんなのかまったら何かに巻きこまれそう。

「ひどーい。冷たーい。俺、坂月さかつき 礼れい。よろしく。」

その男子は私にいきなり自己紹介してきた。

いきなり何こいつ。

犬？

私は目を細めた。

「何か妙にム力つくんだけどその顔。ところで本当に大丈夫？めっちゃ顔色悪いぞ？」

その坂月とかいう男子は私に尋ねてきた。

私のこと気遣ってくれてるんだ。

ふーん。

まあまあ、いい奴じゃん。

「大丈夫。心配してくれてありがとう。」

私は微笑みながら言った。

あまり笑いたくなかったけど。

少しこの人は他の誰よりも怖い目だったような気がした。

少し、怖い。

そう思った。

・
・
・
・
・

このときに気づいてなかった。

この人に逢っていなかったら。

この人が私に声をかけなければ。

後悔という言葉が涙に変わることは無かったんだ。

・
・
・
・
・

次に続く…

傷跡 4

「いいからどっか行ってくんない？目障りなんだけど。」

男にはこのくらいが丁度いいと思う。

しつこい男にはこれくらい言っとかないとこりないから。

「えーやだー。俺江水さんと離れたくないー。」

坂月は駄々をこねだした。

頬をふくらませてすねた。

可愛いのか可愛くないのかよくわからないが。

「じゃあ、私が違うところに行く。」

私はム力ついたので席を立って歩き始めた。

グラッ

え？

私はいきなり視界がぼやけた。

何これ？

私はそのまま倒れた。

「やっぱり。俺の予想当たったわ。よいしょっと。軽いな。ちゃんと飯を食ってねーんだな。」

私は坂月に抱きかかえられた。

何か腕の中を小さく感じるの。

やっぱり嵯巳儀先生のせいかな。

私はそう思いながら目をつぶっていた。

そのときだった。

「江水？坂月、江水どうしたんだ？」

嵯巳儀先生の声が聞こえた。

あ、嵯巳儀先生だ。

私は一瞬心が弾んだ。

声の一つや二つでこんなにも感情が揺れるんだ。

私は始めて実感した。

「坂月はもういいよ。俺が運ぶから。」

嵯巳儀先生が私に手をかけようとしたときに…

フイツ

坂月が嵯巳儀先生の手を避けた。

そのとき一瞬時が止まったように感じた。

坂…月？

私は薄っすら開けていた目をもう少し大きく開いた。

坂月は嵯巳儀先生の手から私を遠ざけた。

「俺が運ぶからいい。彼氏面してんじゃねえよ。お前なんかこいつを渡したくないね。お前とこいつはあわねえよ。じゃあな。」

坂月はそう言って嵯巳儀の隣を通過して進んだ。

坂月はやっぱり他の人の目と違うような気がする。

何かを知っている目。

まさか、坂月は…

「おい、坂月。お前…。」

嵯巳儀先生が何か言いかけたとき。

「うるせーよ。黙つといてやるよ。でも、俺は認めてない。」

坂月は振り返らずに嵯巳儀先生に言った。

坂月。

きつと先生と私がキスをしたところを見たに違いない。

それでこんなことしてるのね。

きつとそつ。

この人は私のことが好きなのかもしれない。

でも、私はもう決めた。

絶対先生を信じる。

・
・
・
・

ガラッ

「先生。クラスメイトが倒れたのでここで休ませてあげてください。」

┌

ポスッ

私は白くてあたたかい保健室のベットに寝かせられた。

あつたかい。

私はベットで寝ながら思った。

「何でお前はあいつなんか…。」

坂月が悔しそうにそうつぶやいたのが聞こえた。

人が傷ついている。

こんなにも人って悔しいって気持ちが表示されるんだ。

ごめんなさい。

私はみんな傷つけるのかもしれない。

私はなんてひどい人なんだろう。

私は坂月が戻った後ベットで一人まるくなりながら泣いていた。

きつともつというんな人を傷つけることになる。

どんなに自分が謝っても許されない。

ごめんなさい。

私はずっと泣いていた。

・
・
・
・
・

私はゆっくり目を開いた。

泣きながら寝てしまっていた。

また貧血だったのか。

いやだな。

私はそう思いながらベットから降りた。

「先生、ありがとうございます。ゆっくり休めたので帰ります。」

私は保健の先生にそうお礼を言って保健室を出た。

目から今にも涙が出そう。

人を傷つけるってこんなに苦しいんだ。

辛いよ。

悲しいよ。

苦しいよ。

何で私はここにいるの？

私は廊下の床に座り込んでしまった。

拭っても拭っても出てくる涙。

きつと心が泣いているんだ。

辛いよ。

そう知らせてるんだ。

わかってるそんなこと。

でも、いまさら諦めるなんて嫌なんだ。

人を好きってどういうことかやっとわかったんだ。

私はあの人が欲しいと本気で思ったんだ。

だから、誰にもこの気持ちは渡せない。

床に落ちる無数の雪。

手から流れ落ち隙間から落ちていく。

まるで砂が流れ落ちるように。

フワッ

そのとき、後ろから誰かに抱きしめられた。

ああ、あつたかい。

きっと私はこの人を求めてた。

探してた。

やっと逢えた。

「送ってってやる。一緒に行こう。」

優しく耳元で囁かれた。

まるでワルツに私を誘っているように。

私を誘惑するこの声。

私の大好きな人。

私は振り返って笑った。

待っていたよ。

と、囁くように。

私達は走って先生の車に乗り込んだ。

バタンッ

いきなり入った瞬間、先生の唇と私の唇が重なった。

少し苦しかった。

そのくらい何か力が入っていた。

激しく。

何かをすぎるように求めてくる唇。

なんだろ？

いつもの先生じゃないみたいを感じる。

「あんなやつに触られやがって。」

先生はそう怖い顔で言った。

え？

それってどういう意味？

私は少し息が荒くなりながらよく理解できてない顔をした。

「わかんないなら、体で教えてやっても良いんだぞ？」

先生は何か抑えきれしていない顔をしながら私の内腿うちももに手を置いた。

ビクッ

私は体が大きく反応した。

怖い。

私はそう思い首を横にふった。

「…悪い。こんなことしても何も変わらないな。本当は俺がこんなことしちゃいけないんだけどな。どうしても気持ちが行動に出ちま
って。」

ギュッ

先生は少し恥ずかしがりながら優しく抱きしめてくれた。

なんだ。

ただの嫉妬だったんだ。

でも、なんだか嬉しい。

妬いてくれたんだ。

私も認められたんだ。

先生。

大好きだよ。

ずっと一緒にいたいよ。

そう思いながら先生の背中に腕を回した。

・
・
・
・

「ありがとうね。送ってくれて。じゃあね。」

私は先生に笑顔で手をふった。

先生はそれに応えながら車にエンジンをかけて行ってしまった。

私は上機嫌になっていた。

私は少し笑みをこぼしながら歩いた。

ん？

私は目の前の光景に足を止めた。

お母さんが少し怖い顔で立っていた。

お母さん、何してるんだろ？

こっち見てるし。

「お母さん？ここで何してんの？」

私は恐る恐る尋ねた。

少し怖い。

知りたくないのに何かを知ってしまいそうで怖い。

ドクンッ

心臓が大きく重く脈を打った。

「あの人は関わらないで。もう…私、大切な人を失いたくないの。」

お母さんは私に悲しい目を向けてきた。

この空気。

何？

大切な人ってお姉ちゃんのこと？

嵯巳儀先生が何に関係があるの？

・
・
・
・
・

きつと気づかなかった。

内緒にしていればずっと幸せでいれると思ってた。

卒業したら堂々と外と一緒に歩けると思った。

でも、きつとそれは私の想像だけにしかなかった。

過去にあんなことが無ければ。

ずっと幸せでいれたと思う。

・
・
・
・
・

次に続く…

傷跡5

「小鈴は妊娠していたの。」

私は息が止まった。

頭が真っ白になった。

今、なんて言った？

お姉ちゃんに子供ができていた…？

「でもね、二人の命を失ったわ。あの人のせいだ。」

お母さんの目はもう輝きが無くなっていた。

お母さんの頬を伝う無数の雫。

あの頃の…

お姉ちゃんがいた頃のお母さんじゃない。

私は絶望した。

もう、私には何も残らないの？

手を何回も伸ばしても届かない。

傷跡をえぐる悪魔達。

私を闇へ引きずり込もうと思ってるのかもしれない。

足元がどんどん吸い込まれていく。

「どうして？ 嵯巳儀先生のせいなの？」

私は絶望したままお母さんに尋ねた。

本当は声も出したくない。

今にも体が崩れ落ちそう。

ここから心が無くなってしまいそう。

知りたくないよ。

「小鈴はあの人をかばって亡くなったのよ。あの人が道路を渡らなかつたら小鈴が亡くなることなんてなかったわ。黙っていたけれど、全部話すわ。小鈴はね、あなたの誕生日プレゼントを買ったために出かけた。そして、後ろからあの人呼んだの。そりゃ彼氏さんだったから気づくわよね。そして、信号の色が青だったからあの方は渡ったわ。その時だったの。居眠り運転していたトラックがあの人の方に向かってきたわ。そして、小鈴はそれをかばって亡くなってしまったの。だから、もう失いたくないの。きっとあの人といるとまたいなくなっちゃう。だから、もうあの人とは関わらないで。」

お母さんはあの子のことを全部話してくれた。

私は気を失いそうになった。

でも、それはきつと違う。

「お母さん、お姉ちゃんのことちゃんと考えてあげてる？お姉ちゃんが先生を守ったのは何でだと思ってるの？ただの人助けだと思ってるの？」

私は今にもこぼれ落ちそうな雫をこらえながらお母さんに尋ねた。

わかってほしい。

お姉ちゃんが先生を助けたのは…

「お姉ちゃんが先生を助けたのは、先生のことを愛していたからだよ。お姉ちゃんの命が先生の命なんだよ？私は先生とは離れないわ。先生が離れると言わないかぎり！！」

私はそうお母さんに叫んで走って逃げた。

逃げたって何処へ行くの？

何処へ行けば、気づいてくれる？

先生。

今、何処にいるの？

・
・
・
・

嵯巳儀先生

あいつに、惚れるとはな。

ごめんな。

小鈴。

お前を愛してやりたかったけど。

俺をかばってくれて。

本当にごめん。

目に映るのは一枚の写真。

二人で笑ってピースしている写真。

遊園地のデートのときに撮った写真。

もうお前の笑顔は見れないんだな。

俺が飛び出したりしなければ、こんなことにはならなかったんだよな。

ピンポン…

いきなり家のインターホンが鳴った。

こんなときに誰だろ？

時計は午後の七時を回っていた。

「はい。どなた…あなたは…」

・
・
・
・
・

私は公園で星を見ていた。

まだ薄暗いくらい程度だけど星が見える。

綺麗。

どうして先生なの？

それって運転手が悪いんじゃないの？

何で先生と関わっちゃいけないの？

お姉ちゃんの命でもあるのに。

私は一人星空の下、泣いていた。

・
・
・
・
・

「あの子に知鈴に二度と関わらないでいてください。それだけです
ので、失礼します。」

訪ねてきたのは知鈴の母親だった。

いきなり何を言い出すんだ？と思ったら、すぐに帰ろうとしたの

を…

「待ってください！！！」

俺は知鈴の母親の左腕を掴んだ。

バシッ

いきなり掴んでいた手を振り解かれた。

俺は目を見開いた。

え？

時が止まったような気がした。

「触らないで！！！！もう私の人生を壊さないで！！！！あなたのせいで…あなたのせいで小鈴は死んでしまったのよ？！！！！それをまた繰り返すつもりですか？！！！！」

知鈴の母親は今までに見たことの無い顔で俺に叫んできた。

目は血走り、歯を食いしばって威嚇しているようにも見えた。

ああ、俺、この人の人生を壊したんだ。

俺は固まった。

息ができねえ。

「小鈴が妊娠した子はあなたの子だったんでしょう？あの子が誰の為でもなく亡くなっていくなら私は「がんばったね」と言ってあげられたのに。あなたがいなかったら妊娠してた子も死ななかったのに！！！！これ以上私達家族の絆を壊さないで！！！！」

知鈴の母親はそう言って走って行ってしまった。

そうだ。

俺が小鈴のことを殺したのか。

俺がいなければこんなことにならなかったのにな。

バカだ。

俺がああ家族の絆を引き裂いてるんだ。

もう知鈴には近づけないな。

・
・
・
・

ブー…ブー…

携帯のバイブが部屋中に響きわたる。

こんな時間になんだよ。

深夜一時。

ピッ

俺は電話に出た。

「はい。嵯巳儀ですけど。」

俺は自分の名を名乗り、起き上がった。

目をこすった。

眠くて眠くてしょうがねえ。

「先生、何してんすか？みんな必死で探してるんすよ？先生だけっすよ。一緒に探してないの。」

電話をかけてきた奴は担任をしているクラスの男子生徒の一人だった。

ん？

みんなって誰だ？

「何を探してるんだ？みんなって誰だよ？」

俺は寝ぼけながら尋ねた。

ドクンッ

大きく脈が打った。

「江水っすよ。家に帰ってきてないそうっす。早く来てくださいよ。」

この言葉をきいたとき。

俺はパジャマのまま飛び出した。

裸足で走った。

「先生??先生ー!!先生?????」

携帯から響いている声は走り出した俺には聞こえなかった。

あいつ。

きっと母親ともめたな。

だから、母親がここにきたんだ。

きっとあそこにいるはずだ。

俺は走った。

息切れしてもいい。

喉が痛くなってもいい。

早く。

早くあいつの傍に行きたい。

・
・
・
・

「はあ、はあ、はあ……」

やっぱりここだった。

小鈴の墓の前に座っていた。

悲しそうな目。

頬を伝う無数の雫。

まっすぐに小鈴の墓を見つめている。

知鈴。

「お姉ちゃん。ごめんね。死んじゃったのは私のせいでもあるんだよね。私の誕生日プレゼントなんて買いに行くから。お姉ちゃん。先生のせいで死んだんじゃないよね？」

え？

俺は驚いた。

こんな言葉が出てくるなんて。

きつと母親に全部聞いたんだな。

「先生をお姉ちゃんがかばったのは先生のことを好きだったからだよね？愛していたからだよね？私、今ならわかるよ。お姉ちゃんの

気持ち。自分の命と先生の命、どっちを取るっていったら。私も迷わず先生の命を選ぶよ。お姉ちゃん。ごめんね。先生のこと好きになっちゃって。これじゃ、お姉ちゃんのこと裏切ることになるよね。お姉ちゃんがいたら先生は今でもお姉ちゃんのことを好きだったのにな。お姉ちゃんと先生結婚してたかもしれないのにな。先生は自分のせいでお姉ちゃんが死んでしまったって思ってるかもしれないけど。きつとそれは違うよね。」

目の奥が熱い。

もうこぼれ落ちそうなくらい溜まってしまった涙。

ごめんな。

頭を回るその言葉。

知鈴は、知鈴の中にある罪悪感と今も戦い続けてるんだよな。

知鈴の声が心に優しく染みていく。

「私、お姉ちゃんが大好きだよ？でもね、私、今はお姉ちゃん以上に先生のが好き。裏切ることになるかもしれないけど。でも、やっぱり先生のが好き。だからお姉ちゃんの代わりに先生を支えていこうと思う。だから安心して赤ちゃんを育ててあげてね。」

知鈴は笑ってそう言った。

俺は走って抱きしめた。

ギュッ

「え?...先生??!!いたの?何でここわかったの??!!!!」

知鈴は動揺していた。

俺は泣いてる顔を隠しながら一言つぶやいた。

抱きしめている力を強くして。

「ありがとう。」

俺は小さい声で、震える声でつぶやいた。

必死に声を抑えながら知鈴の肩をかりた。

ああ、この子と出会えてよかった。

ありがとう。

心の中がいつぱいにこの言葉で満たされていく。

あったかい。

そう優しく感じた。

.....

私と先生は少しの間お姉ちゃんのお墓参りをして先生が家まで送ってくれた。

「嵯巳儀先生、今日は本当にありがとうございました。いろんなこととしていただいちゃって。」

私は苦笑いでお礼を言った。

泣いてる先生は二回目。

それがなんだか嬉しくて。

くすぐったくて。

先生は鼻が少し赤くなっていた。

「嵯巳儀先生、大丈夫？何か風邪引いてない？」

私は不安になった。

なんだか優しい目をしている。

いつもと少し違う。

瞳の奥が何かをうつたえている。

何かをきつと隠してる。

嵯巳儀先生だからきつと誰にも言えないでいるんだろう。

「大丈夫だよ。じゃあな。また明日。」

嵯巳儀先生はそう言って手をヒラヒラさせながら行ってしまった。

先生の後姿が妙に寂しそうで悲しそうだった。

何があったんだろう。

・
・
・
・
・

お姉ちゃんを裏切らなければこんなことにはならなかった？

それとも、お母さんに反論しなければ幸せに暮らせてた？

どうしたら、この現実が幸せになる？

わかんないよ。

・
・
・
・
・

次に続く…

傷跡6

翌日…

私はいつもどおり学校に着いた。

いつものようにみんなにあいさつをして、いつものように準備を
して。

いつものように授業が終わった。

あっけない終わり方。

いつもの風景。

みんなそれぞれに帰っていく。

私は嵯巳儀先生に逢いに行く。

きつと優しく迎えてくれるはず。

「嵯巳儀先生！逢いにきたよ。一緒に帰ろ？」

私は先生に抱きつきながら軽く誘った。

あつたかい。

車の匂い。

フローラルの香り。

あたたかい。

この香りでそう感じる。

先生だ。

と実感できる。

でも、今日は違った。

「ごめん。これ以上俺といたいでくれ。先生方が俺のことを疑い始めてる。俺は教師を辞めたくない。だから、これ以上、俺にかまうな。」

え？

先生は重く言葉を発した。

どういう意味？

私との仲を終わりにしたいってこと？

「別れよう。」

先生は一言そう言って教室を出ようとした。

そんな？

昨日の抱きしめてくれたぬくもりは？

昨日の先生の涙は？

一体どこに行ったの？

「待って！！！！！」

私は教室から出て行こうとした先生の右腕の手首を掴んだ。

少しゴツゴツしてて、男の人とを感じる。

冷たくて何か、悲しそうだった。

「お前といると疲れるんだよ！！！！もう二度と近づくな！！！！！」

先生はそう言って私の掴んでいた手を勢いよく振りほどいた。

私は教室に一人残された。

私は力が抜けて座り込んだ。

頬を伝う無数の雫。

置いてかないで。

私を一人にしないで。

床に落ちる雫は静かに音を立てた。

私は目の輝きを無くした。

私は一人教室で泣き止むのを待った。

・
・
・
・

嵯巳儀先生

ごめんな。

俺が教師じゃなかったら、お前を守ってやれたのかもしれない。

俺はこうすることしかできないんだ。

幸せになれよ。

きっとお前の隣にいていいのは俺じゃない。

お前を幸せにできるのは俺じゃない。

ごめんな。

俺はそう心の中で謝り続けた。

頬を伝う雫の感触がとても冷たいと思った。

腕で拭っても拭ってもあふれ出てくる雫は胸を締め付けた。

まるで、硬い糸が巻きつき食い込むように。

・
・
・
・
・

私はふらつきながら歩いていった。

私はお姉ちゃんのお墓の前で止まった。

ちゃんと話したいから。

先生にふられたこと。

「お姉ちゃん。先生にふられちゃったよ。やっぱりお姉ちゃんじゃないとだめだったってことかな？お姉ちゃん。ごめんね。きつと私がお姉ちゃんを裏切ったからだよね。罰があたったんだね。先生はやっぱりお姉ちゃんのことが好きなんだよね。明日からいつものように接しなきゃ。……ねえ、私どうすればいいの？私、先生を諦めなきゃいけないの？どうして先生はあんなこと言ったの？お姉ちゃんは…お姉ちゃんは。」

私は泣きながらこの世からいなくなってしまったお姉ちゃんに何度も問いかけた。

お姉ちゃん。

教えてよ。

私、どうすればいいの？

もう先生に触れられないの？

先生はもう触れてくれないの？

「知鈴。知鈴。」

え？

優しい声。

久しぶりに聞いた声。

涙があふれ出てきた。

聞きたかった声。

「お姉ちゃん？お姉ちゃんなの？?!！」

私は泣きながら周りを見まわした。

でも、お姉ちゃんの姿は無い。

でも、この声は確かにお姉ちゃんの声だ。

「知鈴。落ち着いて聞いてね。あなたは竜斗を信じてあげなさい。諦めないで。竜斗はきつとまだ知鈴のことを思ってくれてる。でもね、何かがきつと邪魔をしているだけ。だから、きつと竜斗と知鈴が思いあつてる以上、何も怖いことなんてないから。だから、信じてあげて。竜斗はきつと私が死んだことを自分のせいだと思ってる。だから、あなたに近づけない壁がある。その壁を知鈴、あなたが壊してあげなさい。あなたが竜斗のことを邪魔しているもの調べてちゃんと証明してあげなさい。私は絶対あなたこのことを諦めないって。」

お姉ちゃんの声はゆっくり、でも、何かを確認するかのようにつきかりと聞こえた。

お姉ちゃんが私を応援してくれてる。

大丈夫。

だって、お姉ちゃんが私のことを応援してくれてるから。

お姉ちゃんが言ったことで嘘なんて一切なかったから。

「お姉ちゃん。ありがとう!!!!私、絶対先生を振り向かせてみせる!!!!!!」

私はそう言って走り出した。

きっと目の前には光りがある。

先生。

見てなさい。

今にも、あなたを取り返して見せるわ!!!!!!

.....

家

「お母さん!!!!!!先生に何か言ったでしょ????!!!!!!」

私は一番怪しい母に怒鳴った。

私は息切れしながら思いつきり声を出した。

絶対先生を取り返してみせるわ!!!

「なんのことかしら。」

母は皿を洗いながら目を背けた。

きつと無理だと思ってるんだ。

先生のバカ。

お姉ちゃんみたいに早く忘れようと思ってるの？

そんなの。

絶対させないんだから!!!!!!

「お母さんがそう言うなら私は出てくわ!!!!!!お母さんが何を言おうと私は先生のことを諦めないから!!!!!!」

私は母にそう怒鳴った。

私の決意。

きつとお母さんにも届く。

お姉ちゃんが私のことを応援してくれたんだから、私はそれを心に刻んで進まなくちゃ！！

私はそう心に決心した。

「……………お願いだから……………」

微かに聞こえた。

今にも消えそうな細い声。

母が声を震わせながら、言葉が続けた。

「お願いだから、これ以上悲しい思いをさせないで。小鈴はあの人のせいでいなくなってしまったの。だから、きつとあなたもなってしまう。知鈴。お願いだからあの人は今後一切あの人は関わらないで。」

母が泣いた顔が、切なくて、悲しくて、苦し思ったのは、きつとこのときだけだと思う。

声が震えながらまるで鳴けない小鳥のよう。

力が抜けて座り込んだ母を私は心を押し込めながら見つめた。

これは誰にも譲れない思い。

泣いた母が目の前にいたって。

私はこの思いを貫き通す。

「誰が邪魔しようとして、私はこの思いを変えないよ。お姉ちゃんのためにも……」

そっだ。

お姉ちゃんが私のことを応援してくれたんだもの。

先生だって、私のことを認めてくれたんだ。

例えお姉ちゃんのことを今でも思っていようとも。

私は先生を愛しているから。

絶対に負けない!!!

「小鈴のためにも？」

母は涙目で私のことを不思議そうに見つめた。

多分、驚いただろう。

お姉ちゃんが亡くなってしまったときからお姉ちゃんの話は一切しなかった私のことが驚きでしょうがなかったのだろう。

でも、今は話せる。

感じるんだ。

お姉ちゃんが私の後ろで微笑んでくれてるって。

今なら、笑顔でお姉ちゃんの話ができる。

「お姉ちゃんが私のことを認めてくれたんだ。だから、例えお母さんでも、私は止められないよ。それに、お姉ちゃんが死んだことは先生のせいじゃないもの。お母さん。それはただの逆恨みだよ。先生はきつと自分の心を押し込んで。自分のせいでお姉ちゃんが死んでしまったって。きつと責任を感じてる。だから、お母さんの言ったことをきくことで罪を償っているつもり。でも、それは、本当の償いじゃない。ただ、気持ち無くそうとしてるだけ。何も解決してないんだよ。お母さんは本当にそんなことをして、私が、お母さんがお父さんが、幸せになれると思う？」

私は母にゆっくりとはつきりと話した。

自分の心にも刻み込みながら母に話した。

気づいて欲しいよ。

お母さんにも、先生にも。

きつと届く。

そう信じてる。

「わかったわ。もう先生には何も言わないわ。ただ、そんなことになるのは先生にちゃんと守ってもらわなきゃね。」

母は涙を頬に伝わせながら笑って許してくれた。

ありがとう。

お母さん。

私は笑ってお母さんに抱きついた。

私はお姉ちゃんみたいにはならないよ。

絶対ね。

・
・
・
・
・

きつと振り向いてくれるよね？

そう、信じてるから。

ずっと。

・
・
・
・
・

次に続く…

傷跡7（前書き）

最終話は急展開なので、そのところはご了承ください。

傷跡7

私は走った。

先生のいるところなんてすぐにわかるよ。

だって、私はいつでも先生のことを思っているから。

私は息切れをしながらあの場所に走った。

がんばれ。

お姉ちゃんがそう耳元で囁いているから。

きっと、あの場所しかない。

私は動きっぱなしだった足をゆっくり止めた。

足の裏がジンジンする。

のども痛い。

呼吸が荒くなって心臓の音も乱れている。

それでも。

それでも、先生に逢いたかったよ。

話したかったよ。

私の目の前の光景は先生が一人でお姉ちゃんのお墓の前に立っている。

悲しそうな目。

強く握っている拳。

食いしばっている唇。

きつと悔しいのだろう。

先生、もう抱え込まないで。

私の前では泣いていいから。

自分の心を押し殺さないで。

ギュッ

私は先生に向かって走って、強く抱きしめた。

「?????!?!?!どうして、お前がここに?????!?!?!」

先生は驚いた顔をしながら私の絡んでいた腕から抜け出した。

きつと辛いと思う。

自分の気持ちを押し込めて、我慢して。

きつとずっとそうしてきたんだと思う。

でも、私の前ではそんなことしないで。

私の前では泣いてよ。

私の前では欲しがってよ。

私の前ではわがままになってよ。

先生の全部を受け止めるから。

ずっと傍にいようよ。

「先生。もう、自分を押し込めないで。私の前では弱虫でいてよ。全部、私が受け止めるから。全部ひっくるめて先生を好きでいるから、私を見てよ。」

私はいつの間にか気づいたら頬を涙が伝っていた。

きつと欲望が溢れ出てきたんだ。

先生に振り向いて欲しいんだ。

私はそつと先生の首に腕を回した。

背丈があまりにも違うからちよつと難しいけど。

相手が先生ならいつだって耐えられるよ。

大好きだから。

大切だから。

ずっと傍にいたいから。

守りたいから。

受け止めたいから。

お願いだから…

ギョッ

先生が私の背中に腕を回して強い力で私のことを抱きしめ返してきた。

「好きだ。俺でも、いいのか？本当に俺、お前と付き合っていていいのか？」

先生はまるで犬が寂しく鳴いてるような声で苦しそうに訪ねてきた。

ねえ、先生。

私、先生の全部を知りたいな。

悔しい気持ちも。

悲しい気持ちも。

苦しい気持ちも。

楽しい気持ちも。

嬉しい気持ちも。

全部知りたいな。

「うん。絶対先生じゃなきゃ、だめなの。私も先生が好きだよ。ずっと、これからも、変わる事なんてないからね。」

私は先生に耳元で囁いた。

心がどんどん静まっていく。

ゆっくり。

トクン…トクン…

ゆっくり。

トクン…トクン…

先生に触れてると安心する。

お願い。

私の傍にいて。

「俺もずっと好きでいる。知鈴が好きだ。小鈴の妹だからじゃない。知鈴が好きなんだ。だから、俺のことを支えてくれないか？」

先生は真剣な目で私のことを見つめながら告白をしてくれた。

先生の目は黒く綺麗に澄んでいて、まるで夜の静まっている海のように。

深くて落ち着いていて綺麗。

「うん。ずっと、支えるよ。」

私は笑顔で先生に誓った。

きっと、これからもこんなふうに抱き合っていこうね。

私はそう思っていた…

・
・
・
・
・

あれから、五年。

私の隣には、あの人の姿は無い。

何故か？

そんなの…

私が聞きたい。

・
・
・
・
・

「俺、小鈴の声が聞こえてさ。「今すぐここに来なさい!!」って怒られてさ。ここってどこだよ?って思ったけど。すぐわかったよ。小鈴が言うところはあそこしかないってな。それで、お前に逢えた。本当に小鈴には世話になってばかりだよ。」

先生はちよつと照れながら寂しそうに言った。

きつと今はお姉ちゃんのごことは好きとは思ってはいないだろうけど。

でも、やっぱり何か心に引っかかる。

「そうなんだ。でも、よかった。先生に逢えた。これからもずっとよろしくね。」

私と先生は手を繋ぎながら歩いてた。

ねえ、先生、この手を離したら私許さないからね。

私は強がってた。

夜道の歩道を歩いてたとき。

いきなりキキィーッッッ!!!!と大きな音がした途端

目の前がすべて真っ白になった。

バンッ!!!!!!

また大きな音がした。

生きていても無駄だと思った。

「先生？先生？？！！ねえ、冗談だよな？先生は私の隣からいなくなるよな？」

私は血まみれの先生に体をゆすりながら尋ねた。

目を開けて。

もう泣かないから。

ずっと笑ってるから。

ずっと先生を好きでいるから。

どんなことでもするから。

だから…

生きてるよって言って私を安心させて。

お願い。

これ以上大切な人は失いたくない。

これ以上傷を作りたいくない。

先生はそれ以来目をあけるときは無かった。

先生。

ごめんね。

・
・
・
・

私はそれ以来、人と話すことを極端に嫌がった。

家族ともあまり話せなくなった。

言葉を口にしてしまったら。

口を開いてしまったら。

きっと目の前からみんながいなくなる。

そんなの嫌だ。

この世はなんて残酷なんだろう。

冷たい肌。

輝きが無い瞳。

なんて悲しいんだろう。

心が無い人間がここまで怖くなるなんて思わなかった。

今でも全部を思い出すと涙が溢れ出す。

今の私には隣で支えてくれる人がいる。

やっと一人できた大切な人。

今はまだ、あまり話せてないけど。

いつか話そうと思ってる。

いつか素直に話せるようになったとき。

心に封印の鍵をかけている箱を開けて。

現実を話そうと思ってる。

傷跡をえぐる現実を今も訴え続けている悪魔達のことを。

全部話そうと思ってる。

先生。

あの時、私をかばってくれてありがとう。

あの時は、思ったよ。

どうして一緒にしてくれなかったの？

どうして私のことかばってしまったの？

って。

でもね。

ようやくわかったよ。

あの時は見えていた答えにたどり着けなかったただけだって。

今はちゃんとわかるよ。

愛していてくれたからだよね？

きっと大丈夫。

いつか素直に現実を認めるから。

また近々お墓参りに行くからね。

あのときの思い出の場所の隣にいるあなたに。

また顔を見せるから。

今度は新しい大切な人と。

END

傷跡7（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
前に投稿したのも、これから書くものも、読んでくれたら嬉しい
です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0412h/>

傷跡

2010年10月21日06時28分発行